

ルカによる福音書8章4-15節 「私たちの土の心」

1A 四種類の土 4-8

1B 道端 5

2B 岩の上 6

3B 茨の真ん中 7

4B 良い地 8

2A 聞いても悟らない人たち 9-10

3A 御言葉を受け取る心 11-15

1B 種なる神の言葉 11

2B 四つの反応と応答 12-15

1C 信じない者に働く悪魔 12

2C 根がない信仰 13

3C 思い煩い、富、快樂も育てる人 14

4C 立派な良い心 15

本文

ルカによる福音書8章を開いてください、私たちの聖書通読の学びはルカ 7 章まで来ましたが、午後礼拝で 8 章を一節ずつ学びます。今朝は、イエス様の四種類の土の喩えに注目したいと思えます。「4 さて、大勢の群衆が集まり、方々の町から人々がみもとにやって来たので、イエスはたとえを用いて話された。5 「種を蒔く人が種蒔きに出かけた。蒔いていると、ある種が道端に落ちた。すると、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。6 また、別の種は岩の上に落ちた。生長したが、水分がなかったので枯れてしまった。7 また、別の種は茨の真ん中に落ちた。すると、茨も一緒に生え出てふさいでしまった。8 また、別の種は良い地に落ち、生長して百倍の実を結んだ。」イエスはこれらのことを話しながら、大声で言われた。「聞く耳のある者は聞きなさい。」9 弟子たちは、このたとえがどういう意味なのか、イエスに尋ねた。10 イエスは言われた。「あなたがたには神の国の奥義を知ることが許されていますが、ほかの人たちには、たとえで話します。『彼らが見ていても見ることがなく、聞いていても悟ることがないように』するためです。11 このたとえの意味はこうです。種は神のことばです。12 道端に落ちたものとは、みことばを聞いても信じて救われないように、後で悪魔が来て、その心からみことばを取り去ってしまう、そのような人たちのことです。13 岩の上に落ちたものとは、みことばを聞くと喜んで受け入れるのですが、根がないので、しばらくは信じていても試練のときに身を引いてしまう、そのような人たちのことです。14 茨の中に落ちたものとは、こういう人たちのことです。彼らはみことばを聞いたのですが、時がたつにつれ、生活における思い煩いや、富や、快樂でふさがれて、実が熟すまでになりません。15 しかし、良い地に落ちたものとは、こういう人たちのことです。彼らは立派な良い心でみことばを聞いて、

それをしっかり守り、忍耐して実を結びます。」

私たちは、あと二週間後に教会のバプテスマ式を控えています。バプテスマを受けるということは、イエス様の命令に従うことそのものであり、イエス様の弟子になることでもあります。ここ 8 章は、イエス様が本格的に弟子たちをご自身の弟子として訓練する箇所になっているので、ここを今日学ぶことは、とても時宜にかなっていると思います。その出だしの話が、四種類の土の喩えです。

1A 四種類の土 4-8

イエス様が、群衆が集まっているところでお語りになっていることに注目してください。4 節にそう書いていますね。イエス様のところに、弟子たちだけでなく、ただ付いてきている人々も大勢いたのです。このような群衆にも語り、なおかつ弟子たちを教えるにはどうすればよいのか？そこで、イエス様は譬えを語られました。全ての人が、種を蒔く風景は理解することができます。私たちは、農耕文化とはかけ離れた都市文化に生きていますが、当時の人々にとって種蒔きは、私たち東京の人間が、電車の走っているのを見ているぐらい、ありふれた風景です。そういったことを語られました。けれども、その同じ話には、神の国の奥義が隠されていました。

種蒔きをするのは、もちろん、その種が発芽して、成長して、実を結ぶためです。ですから、耕された土に種を蒔くのですが、しかし種を蒔いた人が意図していないところにも種が落ちます。それが、初めの三つの土です、道端、岩の上、そして茨の真ん中です。

1B 道端 5

初めの道端です。「5 「種を蒔く人が種蒔きに出かけた。蒔いていると、ある種が道端に落ちた。すると、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。」これは、「畦道」という日本語が適切だと思います。田んぼと田んぼの間の道は、コンクリートの道路ではありません。土を踏み固めて、その道を人々が頻りに歩くので、固められています。芽を出すまでもなく、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまいます。

2B 岩の上 6

次に、岩の上です。「6 また、別の種は岩の上に落ちた。生長したが、水分がなかったので枯れてしまった。」これは、説明を必要とします。イスラエルの地域に特有の現象だからです。イスラエルは、地中海性気候です。そして岩地が大きな部分を占めています。表面では、土がどれだけの深さか分かりません。けれども、その多くが、土がとても薄い岩地である場合が多いです。春の初頭、つまり、2 月から 3 月にかけてですが、一気に緑が広がり、花が咲きます。ベエル・シェバのような、ネゲブの砂漠にあっても、その砂漠に一気に緑色に変わるのです。ところが私たちが驚くのは、それが長く続かないということです。イスラエルは、日差しが強いです。強いからこそ、土が浅いのですぐに芽を出します。ところが、岩地ですから根を張っていません。水分を補給できないの

で、すぐにしおれて、枯れてしまうのです。ですから、5 月以降にイスラエルに行けば、まるで違う風景を見ることができます。一度、生えた緑は秋になるまで枯れないというのが私たちの感覚ですが、イスラエルでは一部を除いて2か月ぐらいの楽しみ、ちょっと桜に似た、はかなさがあると思います。イザヤ書 40 章 8 節に、「草はしおれ、花は散る。しかし、私たちの神のことは永遠に立つ。」とありますね。イスラエルの人たちには、花や草のはかなさは身に染みているのです。

3B 茨の真ん中 7

そして、茨の真ん中に落ちた種です、「7 また、別の種は茨の真ん中に落ちた。すると、茨も一緒に生え出てふさいでしまった。」茨とありますが、いわゆる雑草です。朝顔のような、つる植物であればなおさらのことです。種は落ち、発芽し、成長するのですが、同時に、雑草も生えて育ちます。つる植物であれば、その作物に巻き付きます。それで、生えて来る中で塞いでしまうのです。

4B 良い地 8

そして良い地です。「8 また、別の種は良い地に落ち、生長して百倍の実を結んだ。」良い地に落ちさえすれば、百倍の実を結ぶことになります。麦がそうですね、イスラエルでは麦を育てていました。日本では稲作を思い出せばよいでしょう。一粒のお米から、実は 100 から 200 の粒が実るそうです。

2A 聞いても悟らない人たち 9-10

そしてイエス様は、「イエスはこれらのことを話しながら、大声で言われた。「聞く耳のある者は聞きなさい。」」とされていますね。主は、全ての人がこの警えを悟ることができるとは思っていませんでした。人が聞く時に、その聞く能力があることを知っておられました。そして、ご自身が無理やり、人々に分からせること、説得することはできないことを知っていました。ですから、「聞く耳のある者は聞きなさい。」と言われたのです。これは、私たちにはとても重要な教訓です。私たちが、聞く耳を持っていなければ、聞こえていても聞いていないということがしばしば起こる、ということです。聞く耳を持っているからこそ、聞くことができるのです。もし持っていなかったら、聞いていても聞いていなくても同じことで、無益です。

そして、弟子たちとの会話に移ります。「9 弟子たちは、このたとえがどういう意味なのか、イエスに尋ねた。10 イエスは言われた。「あなたがたには神の国の奥義を知ることが許されていますが、ほかの人たちには、たとえで話します。『彼らが見ていても見ることがなく、聞いていても悟ることがないように』するためです。」

イエス様が引用されているのは、イザヤ書 6 章からです。イザヤがこれからイスラエルの民に遣わされて、預言を語るけれども、人々は聞かないということを予め言われました。それで、見ても聞くことが無く、聞いても悟ることがないと言われたのです。イエス様のところには、大勢の人たちが

来ているのですが、イエス様の語られることは聞いても悟ることがなく、見ていても見ることはないと言われているのです。

これは、イエス様が敢えて彼らから真理を隠しているのではありません。そうではなく、神の国のことを明らかにしても、それを悟ることはない、それを見ても見えていないと言うことが起こるからです。イエス様は、人々に知ってもらいたいと願っています。けれども、聞く耳がなければ聞くことができません。そこで、喩えを語られてそれでも聞いてもらおうとしておられます。喩え自体は、身近な話なので聞き入ってくれているでしょう。しかし、それ以上の興味がなく、心の準備がないので、彼らがそれ以上、いったいどういう意味なのか尋ねてこないのです。

弟子たちには、神の国の奥義を知ることが許されていると言われていていますね。群衆と弟子の違いは何でしょうか？弟子たちはそばにいます。イエス様は、自分たちの必要を満たすための対象ではありませんでした。群衆は、病人がいるから直してもらいたいという動機を持っていました。けれども、それはイエス様を利用することはあっても、イエス様に従っているのではありません。けれども弟子たちは、師匠と共にいることを選びました。この方から学ぶことを選びました。そして、この方の命令に従うことも学ぼうとしています。群衆と弟子たちとの違いは、「弟子たちはイエス様のそばにいます」ということなのです。私たちは、キリストのそばにいますか？日々、イエス様と共に歩んでいますか？この方に毎日、祈っていますか？みことばを、この方から毎日、毎朝、聞いていますか？

3A 御言葉を受け取る心 11-15

1B 種なる神の言葉 11

そしてイエス様は、喩えの意味を教え始めます。「**11 このたとえの意味はこうです。種は神のことばです。**」私たちが、自分のクリスチャン生活から実を結ばせるために、絶対に欠かせないのは神の御言葉だということです。実を結ばせるのに、まず種が必要です。種の中に、その植物の全ての情報が入っています。そこに、小宇宙のような世界、限りない可能性を含んでいます。種は命です。ペテロは、私たちは新しく生まれたのは、種である神のことばであると言っています。「**I ペテ 1:23 あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく朽ちない種からであり、生きた、いつまでも残る、神のことばによるのです。**」そして、成長するのも、神の言葉に拠ります。「**2:2 生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、霊の乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。**」そしてイザヤ書には、神のことばは虚しく返って来ることはないと言われています。「**55:11 そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、わたしのところに、空しく帰って来ることはない。それは、わたしが望むことを成し遂げ、わたしが言い送ったことを成功させる。**」

2B 四つの反応と応答 12-15

ですから、なぜ、人々がそれでも新しく生まれぬのか？また成長しないのか？そして、神のこ

とばが虚しく返って来るように見えてしまうのか？それは、聞いている人々の心の状態が問題だからです。神のことばが問題ではなく、聞いている人々の姿勢が問題なのです。

1C 信じない者に働く悪魔 12

「12 道端に落ちたものとは、みことばを聞いても信じて救われないように、後で悪魔が来て、その心からみことばを取り去ってしまう、そのような人たちのことです。」道端に落ちた種は、みことばを聞いてはいても、それを信じていないという問題です。そういったことが聖書には書かれているのだな、というぐらゐの理解はあるのですが、それが自分に何の関係があるのかは敢えて問わないという姿勢です。その語られていることはまるで謎のようであり、理解するに値しないと思っているかもしれません。キリストの愛、十字架に示された愛とその後の復活についても、どうも空想話に聞こえているかもしれません。

そのような心の状態であれば、信じることはまずありません。神のことばを聞いて、そこに信頼を寄せなければ、それは救われるための知識にはなりません。聞いているだけでは救われないのです。そして、厳しい事実があります。信じないと、その代わりに、悪魔の偽りを信じるようになってしまうのです。「後で悪魔が来て、その心からみことばを取り去ってしまう」と言っていますね。「Ⅱテサ 2:10-12 また、あらゆる悪の欺きをもって、滅びる者たちに臨みます。彼らが滅びるのは、自分を救う真理を愛をもって受け入れなかったからです。それで神は、惑わす力を送られ、彼らは偽りを信じるようになります。それは、真理を信じないで、不義を喜んでいたすべての者が、さばかれるようになるためです。」サタンが偽りや惑わしを送り、それを信じるようになります。自分は何に対しても中立である、ということとはできないのです。

2C 根がない信仰 13

次の反応は 13 節です。「13 岩の上に落ちたものとは、みことばを聞くと喜んで受け入れるのですが、根がないので、しばらくは信じていても試練のときに身を引いてしまう、そのような人たちのことです。」この心の態度は、先の岩の上の草や花で、これがずっと続くと騙されてしまうのと同じように、騙されてしまいます。この人は、劇的な回心をしたのだと思ってしまう。

ある時は、感動的に反応します。イエス様の話を聞いて感動します。涙を流し、自分はいかに罪が赦され、イエス様に愛されているかを話します。ところが、何か自分の身に試練や困難が来ると、その気持ちが無くなってしまいます。それで、それ以上の深みが、神のことばと自分との間に無かったので、関係そのものもなくなってしまうのです。ある時は知的に受け入れていきます。聖書の話が面白い、というものです。イエス様の話が面白くて、それで引き込まれている。そして、確かにこの方は主であり救い主だ、この方を信じておくようにする、とします。ところが、自分の身に試練が来る時に、そのような知的な好奇心だけであれば、すぐに疑うようになります。また、他の人から挑みかかられて、それでやはり、間違っていたのかもしれないと思えます。喜んで受け入れたの

ですが、それがあまりにも反応が大きいので、激的に変わったと周りには思ってしまうのですが、実は逆に、根が張っていなかったから大きく反応してしまうのです。

ここで大事なのは、「しばらくは信じていても」であります。一時期は信じているのですが、長続きしないのです。そして、「身を引いてしまう」という言葉も大事ですね。自分が取り組んでいるイエス様についてのことから、自ら距離を取っていくということです。

3C 思い煩い、富、快樂も育てる人 14

そして、次は反応です。「14 茨の中に落ちたものとは、こういう人たちのことです。彼らはみことばを聞いたのですが、時がたつにつれ、生活における思い煩いや、富や、快樂でふさがれて、実が熟すまでになりません。」このような心では、実はしっかりとみことばを聞いて、信じていて、心に留めているのです。そして、新しく生まれているという確信もあります。しかも、先の岩の上の種とは違って、しばらく信じているというものではなく、いつまでも信じています。ところが、「時がたつにつれ」とあります。ずっと信じているのですが、時がそれだけ経ちます。そこで実は、信じているだけでなく、他にも養い育ててしまっているものがあつたのです。それが、「生活における思い煩い」であります。

イエス様の言葉は、基本、「マタ6:33 まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」というものです。私たちが神のことばを聞いて、それを信じて応答しようとする時に、必ず、具体的なこと、食べたり飲んだり、着る物、そして住む所など日常の事柄について刺激されます。必ず、私たちは自分の今の安定したように見える生活が、みことばを実践しようとしたら、壊されてしまうのではないか？という思い煩いが出て来ます。それとの葛藤ですね。しかし、それをも主に任せて、主が加えて与えてくださることを信じて、御国を第一に求めます。しかし、そのことをしないということが、ここでの問題です。つまり、思い煩いの心を、そのまま放置してしまっている状態です。

その時に、思い違いをしてしまうのです。自分は確かに成長しているように見えるのです。事実、植物の身丈が高くなっていきます。ところが同時に、思い煩いも生えさせて、成長させていつまっているのです。そこで、せつかく自分自身を御霊に関する事柄に捧げて来たのに、なぜか、それにふさわしい実を結ばせていないのです。使徒パウロは、そのような状態の人たちを「キリストにある幼子」と呼んでいます。「I コリ 3:1-3 兄弟たち。私はあなたがたに、御霊に属する人に対するようには語る事ができずに、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように語りました。私はあなたがたには乳を飲ませ、固い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。あなたがたは、まだ肉の人だからです。あなたがたの間にはねたみや争いがあるのですから、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいることにならないでしょうか。」そうなんです、クリスチャン用語はよく知っているのですが、やっている

ことは、ただの人と何ら変わらないということが、あまりにも多くあるのです。

イエス様との時間を過ごしているかどうか？ 自問自答しないといけませんでしょう。自分が次にしなければいけないことがあるとして、立ち止まってイエス様との時間を作っていないのであれば、それは「思い煩い」に陥っている証拠です。そして、「富」についても警告しています。富が入るか入らないかは定かではないし、入ったとしてもそれは虚しく過ぎ去ってしまうかもしれません。けれども、富そのものが汚れているわけでも、悪でもありません。それを愛することが罪なのです。けれども、富には力があります。だから、富に引き寄せられてしまうのです。そしてあくなき思い煩いを富に関して行なってしまいます。二つの主人に仕えることはできない、とイエス様は言われました。それから、「**快樂**」です。生活に余裕があれば、富があれば、それだけ自分自身を楽しませたいと願います。それで、しなくてもよいようなことをするようになります。買わなくてよいものを、買うようになってしまいます。

このようになっている時に、自分は教会に来ているから大丈夫と信じていても、実が結ばれていないことが多いのです。いつまで経っても、争いや妬みがある。人を安易に表面的なことで裁く。自分は満たされたいと思うから、注意を引き寄せるために人を試す。そうしたところにずっと留まっ

4C 立派な良い心 15

このように三つの反応を見ましたが、次の最後は応答することです。反応と応答は違いますね。反応は自分に出て来るものですが、その出てきたものを自己制御するのではなく、そのままにさせていくことです。しかし次は、応答するのです。「**15** **しかし、良い地に落ちたものとは、こういう人たちのことです。彼らは立派な良い心でみことばを聞いて、それをしっかり守り、忍耐して実を結びます。**」

段階を追っていますね。一つに、「**立派な良い心でみことばを聞き**」ています。これまでは、そもそもが心に欺きがありました。受け付けない頑なな心。受け入れたように見えて、実は岩のように固くしていること。そして受け入れているけれども、他にも思い煩いがあつて、富を求め、快樂を求めていること。そうではなく、「**立派な良い心**」つまり、公正明大な心ということです。そのままを受け入れ、部分的に、都合よく聞いて行くものではありません。全体をそのまま、正直に、自分自身に当てはめます。次に、「**それをしっかり守り**」とあります。神から与えられたことばを、その場で、ふむふむとして聞いているだけでは、しっかりと心に留めます。そして試練が来ても、それを心に留めているのです。手放さず、しっかりと守っているのです。そして「**忍耐して実を結びます**」とあります。忍耐という言葉です。これは農業の時もそうですが、作物を育てる時に、なかなか実を見ることはありません。しかし時が来れば見ます。それと似ていて、忍耐して待つのです。忍耐して信じるのです。そうすれば、必ず実を見ることが出来ます。